

NPO法人地球子どもクラブ主催

ぼくたちの地球を守ろう



テーマ
「大切な資源」
Natural Resources



第26回 小学生・中学生

第20回 小学生・中学生

作文コンクール ポスターコンクール

入賞作品集

内閣総理大臣賞

タイトル：【「始末」ということ】

兵庫県 2年生 西村 公介

「始末は、始まりを増やして終わりを減らすことやで。」亡くなった祖母がよく言っていた言葉だ。裏面が印刷していないチラシは小さく切って束ねてメモに。タオルは破れるまで使った後は雑巾に。祖母は、物を最後まで使い切っていた。昼間は、カーテンを全開にして部屋は電気をつけない。お風呂は、家族みんなが連続して入る。「始末」は、徹底していた。

私が四年生になり、祖母が亡くなるまで始末は続いた。正直に言うと、少し面倒くさかった。祖母が亡くなって、もうすぐ三年。「資源」というテーマを見たときに、最初に思いついたのが祖母のことだ。祖母は、戦時中に育った。物が無くて、本当に困ったらしい。「戦争で物をたくさん壊したりしとったお陰で、みんな物が無くて困ったんよ。日本は資源も無い国やからね。」と聞いたことがある。大変な時代を生きてきたのだと思った。

今、私たちの周りは物にあふれている。もちろん、日本が資源の豊かな国になったわけじゃない。世界中の国の人たちから、資源を分けてもらっているからだ。でも、その資源は、無限に出てくるものではない。石油は、あと四十年くらい。原子力に使うウランも百年くらいで無くなってしまおうらしい。その後の世界はどうなってしまおうのだろう。祖母が子供に頃のように、物が手に入りにくい時代が来てしまうのだろうか。それとも、強い軍隊やお金を持っている国が、資源を独り占めするような世の中が来てしまうのだろうか。そんな世界にはなって欲しくない。この問題を解決するには、祖母の言っていた「始末」が大切だと思う。新しいエネルギーやリサイクルの方法を開発するのは駄目だと思う。この二つは、どちらも大切なことなのだ。

これからは、限られた資源を効率よく活かすための新しい技術を開発することが必要だ。新しいエネルギー源の発見や少ない資源で物を作る工夫も大切になってくるだろう。今までは、捨てていた物を資源として利用する方法も見つけなければならない。この分野では、日本の得意な科学技術が世界の役に立っていると思う。同時に、私たちも物を大切にしたり、エネルギーを節約したりする工夫を凝らすのだ。リサイクルできる物の数を増やしたりすることも大切だが、もっと大切なことがある。自分の家や国だけが良ければいいと考えないことだ。物やエネルギーを大切に作る代わりに、物や資源には今までよりも高いお金を支払う。そうすれば、物をより大切に作るし、資源を売っている国の人にも、売れなくて困らないで済む。私たちは、世界中の人と協力して、資源を大切にしながら、今より良い世界を作っていく方法を見つけていく。きっと、出来ると思う。そのために、私たちは頑張って勉強しているのだから。

外務大臣賞：小学生部門

タイトル：【家族で取り組む節水活動】

兵庫県 小学校6年生 山本 桜子

「水を出しっぱなしにしないで止めようね。」

シャンプーをしている私の横で母が言った。寒い冬には、お風呂に入ってゆっくりするのが大好きだ。今日もたっぷりの湯船につかる。

「地球上のすべての水をこの湯船一杯に例えると、私たちが使えるお水はどのくらいあると思う？」

母がクイズを出してきた。

「半分くらい？」

「ううん、正解はこの一滴。私たちが使えるのは、たったこの一滴だけなんだよ。すごく貴重でしょう？」

母はそう言いながら、指から落ちる一滴の水を私に見せた。そんなまさか！！湯船に消えていく一滴のしずくを目で追いながら、私はショックを受けていた。

そこで私は、水資源について調べてみることにした。地球は「水の惑星」と呼ばれていることが分かった。でも、実際には98%が海水で2%が淡水。その多くが、南極・北極の氷山であるということ。つまり、私たちが陸上で利用できる水は、全体の0.01%にも満たないことが分かった。それが、母が教えてくれたあの水一滴の量なのだ。

日本では、蛇口をひねれば水がすぐに使えるので、水不足を認識しにくい。しかし、降水量は年々減少しているし、各地で毎年のように水不足も起きている。水資源を大切に守らなければ、地球の危機だと私は思った。

私の住む神戸では、1995年に阪神淡路大震災が起きた。その時、一番困ったことは水だったという。震災のことを更に知りたくなり、居ても立っても居られなくなった私は「人と防災未来センター」に足を運んだ。

飲料水が無い、トイレが使えない、火事が消せないという当時の震災下での水対策は、飲料水には給水車やボトルウォーターを持ち、トイレにはプールや河川の水、消火用には海水を利用するしかなかったことが分かった。

上下水道を上手に利用して水循環を守り、子供でも出来ることをしなくてはいけないのだと強く思った。

家に帰った私は、家族のリーダーになって「ひげをそる時には、一斗水を止めて。」と父の側に立ち、お風呂の残り湯を使って洗濯の手伝いをした。妹とつくった節水のポスターを千分けして水回りに貼り、家族も巻き込んで節水に取り組んだ。

私たちが生活を見直し、小さくても出来ることから取り組めば、自然に優しく大切な地球を守ることが出来ると思う。

疑問を持つことは大切だ。行動に移すことはさらに難しい。でも、たった一つ、行動を変えるだけで、未来の地球の姿が変わるはずだ。美しい「ブループラネット」を守りたい。

今朝の私は、コップ一杯だけの水で歯みがきを終えた。

外務大臣賞：中学生部門

タイトル：【「水」—— 一滴のありがたさ】

静岡県 中学校2年生 植田 幸菜

「水のあるところには魚がいる」これはカンボジアのことわざだ。かつて、カンボジアにある東南アジア最大の湖トンレサップ湖では、水に手を入れるだけで触れる事の出来るほどたくさんの魚が生息していたそうだ。水産資源が豊富で、人々はそれが当然であるかのように…。

カンボジアを家族旅行したのは、小学三年生の時。初めての海外旅行への胸の高鳴りとは真逆に、湖の「茶色の水」を目の当たりにし、一瞬、目を疑った。日本は蛇口をひねればいつでも直接水が飲める。雨や雪は川となってダムに貯められ、浄水場へ届けられる。浄水場では、汚れやゴミを取り除いて消毒し、安心して飲める水が作られるのだ。蛇口から出る水がきれいで透明であることは、カンボジアではなかった。直接水が飲めるということは当たり前ではないことだと、旅行を通して思い知らされた。当然のように水を飲むことが出来なかった。お腹をこわしてしまうことを恐れたからだ。カンボジアは、肌が一瞬のうちに焼けるほど熱く、喉が渇く。水を自由に飲めなくて、喉がジリジリと熱くなった体験をしたのは初めてだった。私たちの生活に欠かすことが出来ない「水」のありがたさを痛感した。

しかし、時には「水」の恐ろしさも体験した。昨年九月八日、台風18号の湿った空気は、私の住む浜松市を襲った。強い風と共に大雨が私たちの暮らしを脅かした。一部の河川が氾濫危険水位に達したり、小さな子が浸かってしまうほどの水が道路を埋め尽くしたりと、手も足も出なかった。私たちの生活は「水」と深く関わって出来ていること「水」によって私たちの生活がこんなにも変わってしまう、ということを目の当たりにした。この時、もっともっと水と上手につき合っていこう、そのためにはどうしたらよいのだろう。フッと頭をよぎった「貯水をしよう」と。雨水の再利用だ。そこで、いらなくなったバケツ、使わなくなったお鍋を外に置いておいた。庭の草花にかけてあげようと思いついたのだ。祖母と一緒に協力している。雨水を利用したことによって、花にあげる1回分の水が節水される。そして、この1回分のきれいな水は、蛇口から直接飲める水となった。節水すれば、その時使わなかった水が他の物として役に立ち、無駄がなくなっていく。

私たちは、日常の暮らしの中で、自然と共生することが大切だ。水は、生きる上で私たちにとって、とても欠かすことの出来ない資源だということを改めて実感した。飲める水一滴へのありがたさ、感謝の心を持って毎日を生活していきたい。

文部科学大臣賞：小学生部門

タイトル：【限りある資源を未来につなぐために】

茨城県 小学校5年生 奥山 陽向

「ゴゴッ。」という大きな音を立てながら、ブルドーザーがものすごい勢いで森をけずっていく。ぼくが両手を大きく広げても、まだかかえきれないほどの大きな木が次々となぎたおされていく。ぼくは、こんな風景を何度も見てきました。

ぼくは毎日、森を歩いて学校に通っています。森に入ると、鳥のさえずりや虫の音が聞こえ、ネズミやモグラも時々顔を出します。森には、たくさんの虫や動物が住んでいます。暑い夏は、木々のおかげでひんやりすずしくて、寒い冬には枝と葉っぱが雪や風をふせいでくれます。ぼくは、いつも森の木々たちに守られているんだなと感じています。

そして、空気をキレイにしてくれているのも木です。ぼくたちが毎日使うティッシュペーパーやトイレットペーパー、ノートや紙の原料となっているのも木なのです。

ぼくたち人間にとって大切な木が、なえ木から立派な森になるまでに、何百年もの年月がかかるのに、たった数日で大きく立派な森がなくなっていくんです。人間が便利で、かいてきな生活を求める一方で、かぎりある資源がものすごいスピードで失われています。

森の木がなくならないために、ぼくは、ティッシュペーパーやトイレットペーパーをムダなく使うようにしています。今まで必要がなくなったプリントは、ぐちゃぐちゃにしてゴミ箱に捨てていたけど、紙のうら側も利用してメモ用紙にする、両面を使ってから資源ゴミとして分別し、再利用することも必要だと思いました。その他にも、ノートや紙を有効に大切に使っていきたいです。とても小さなことかもしれないけど、心がけと積み重ねが大切だと思います。

また、ぼくは弟といっしょに、ドングリを拾って集めています。そのドングリを土にうめると、芽が出てなえ木になることを知りました。子どものぼくたちにも、木を増やすことができるのです。このドングリが育つのが、これから楽しみです。

数あるわく星の中で、地球が一番資源が多い星といわれています。それでも資源には、かぎりがあります。資源がなくては、人間は生きていけないのだから、地球に生まれたぼくは、かぎりある資源を大切に使い、ずっとずっと未来まで資源のある地球であるよう、つなげていきたいと思っています。

文部科学大臣賞：中学生部門

タイトル：【地球のためにできること】
千葉県 中学校2年生 秦野 由惟

みんな「資源を大切に」とか言っているけど「資源」って何？

自然の中から得られる資源は“天然資源”といわれている。「石炭、石油、天然ガス」これらは“化学燃料”と呼ばれ、地球上で数億年という長い年月をかけて、地中の奥深くでつくられてきた資源。“金属鉱物”と呼ばれるいろいろな種類の金属も私たちの暮らしに欠かせない大切な資源。金属鉱物には、鉄や、アルミニウム、銅といった身近なものから、レアメタルと呼ばれるチタンやニッケルまでたくさんの種類がある。他にも“非金属物”と呼ばれる石灰石、けい砂粘土のような石や砂だって立派な資源。これらのように、自然から手に入れられる全ての物は資源といえる。もちろん水や木も天然資源。

私たちは、普段使っている物をいらなくなったらすぐに捨ててしまう。それは、資源をムダにしている。本当にそれでいいのか。

ウルグアイのムヒカ大統領は、こう言っている。「この世界の七十億～八十億人の人が贅沢できるほどの資源がこの地球にあるのでしょうか？そんな生活は、可能ですか？貧乏な人は、少ししか物を持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ。」と言っている。まさに、先進国の人達の暮らしのことだと思った。

自分たちが今、この生活が出来ているのは、お金の無い人たちが資源をほとんど使っていないからで、その人たちが自分たちのように同じ生活をしたら、資源が足りなくなる。資源を使わない人たちがいるからこそ、自分たちはたくさん資源を使って生活する事ができている。私たちが少しずつ、毎日使う資源を減らせばその分、今まで資源を使えていなかった人たちが、少し資源を使えるようになる。先進国は、しきりに、リサイクルと叫び、私たちの中でリサイクルの意識が高まってきた。しかし、完全にリサイクルはできておらず、自然の物を使いくずしている。

私たちの身のまわりでも光熱費を節約する、リサイクルできるものは、リサイクル品として出すこと。私はあまり出来ておらず、電気をつけっぱなしにしてしまうことが多かった。これからは、意識していきたいと思った。使える資源は限られている。私が、出来ることは、物を大切に最後まで使うこと。これで消費がおさえられる。ちっぽけなことだが、まずは、出来ることから始めたい。

環境大臣賞：小学生部門

タイトル：【ぼく達はごみじゃない】

東京都 小学校6年生 石川 桃子

「これからリサイクル工場に行くんだね！」

ここは、とあるマンションのごみ置き場。きれいに分別された資源ごみ達がさわいでいる。すると、『可燃ごみ』と書かれたかん板の下から不満げな声が聞こえてきた。ごみ袋の中にあるリンゴの芯とエンジンのへただ。

「資源ごみ達は、生まれかわれていいよね。」

「ぼくら生ごみは、相手にされないからなあ。」

そんな会話を聞いていたごみ袋が口を開いた。

「でもね、世界にはみんなも資源として、活やくできるところがあるんだよ。例えば、アメリカのサンフランシスコ市では、市民に生ごみのリサイクルを義務付ける世界初の条例がある。集めた生ごみはたい肥化されて、農家などで使われているよ。」

「すごい！日本ではどうなの？」

「食品リサイクル法のおかげで、事業者のリサイクル率は高くなったよ。たい肥や飼料になっている。生ごみをメタン発酵させてできるバイオガスを利用した発電も始まった。新潟県長岡市などでは、家庭の生ごみもリサイクルされているよ。でも、それはごく一部。生ごみリサイクルに取り組んでいる自治体は、まだ少ないんだ。焼却して、灰を処分場に埋め立てるのが一般的かな。」

「そうなんだ…。」

二人は、かたを落とした。

「でもね、近くにいいところがあるんだよ。」

それを聞いて、二人は目を見開いた。

「今すぐ行きたい！」

「じゃあ、目をつぶって！」

次のしゅん間、二人はある家の庭に着いた。庭のすみで、小学六年生の女の子とお父さんがプランターの前にしゃがんで話をしている。お父さんが、かぶせてある板を外すと表面がうっすらと白くなっている上が見えた。

「何？この白い物は？」

「この間入れたコーヒーかすだよ。び生物が分解し始めているんだ。」

「なんだか、カマンベールチーズみたい。」

お父さんがそっと土をほぐすと、中からミミズ達が顔を出した。

「ももちゃん、よく見てごらん。」

「わあ、やわらかそう。芝生のおいがする。」

「いいたい肥ができている証だよ。」

「すごい！ミミズ達のおかげだね！」

「自然に還せば、野菜くずもたい肥になる。」

「捨てればごみ、生かせば資源だね。みんなでやれば、もっと大きな力になるね。」

女の子とお父さんは、家の中に入って行った。

「ぼく達もたい肥になりたい！」

リンゴの芯とエンジンのへたは、急いでプランターにもぐり込んだ。ふかふかの布団のようだ。

「なつかしいな。昔にもどったみたい。」

「ぼく達はもうごみじゃない！資源なんだ！」

二人はとてもうれしそうに笑っている。その様子を空から太陽がやさしく見守っていた。

環境大臣賞：中学生部門

タイトル：【大切な資源「水」】

福岡県 中学校1年生 野田 壮真

「キュッ、ジャー。」

蛇口をひねると水が出る。まだ小さかった僕は、それが不思議でたまらなかった。これが、水についての僕の初めての疑問。そして、限りある大切な資源「水」について考えるきっかけでもあった。

四年生の時、僕が楽しみにしていた水辺教室があった。水辺教室は、水辺の自然や、水道の仕組み、水の大切さなどについて、専門家の方から教えてもらうという授業だ。僕たち四年生は、ワクワクしながらバスに乗り込んだ。バスの右側に宗像市を代表する川である釣川が見えてきた。

「この釣川の水は、宗像市民の飲み水にもなっています。」

先生の説明を聞きながら、僕たちは、釣川の源流へと向かった。源流は、薄暗い森の中にあった。とめどなく流れる透き通った水を飽くこともなく見ていると、この水が大きな流れをつくることに、とても神秘的な気持ちになった。そして、その冷たくて少し甘い水を口に含むと、水が溢れている泉に生まれてよかった、と心から感謝した。

それから数日後、僕の水への考えが変わる出来事が起こった。下からびた大地。水不足で苦しむ人々。その日の夜に見たテレビの映像に、僕はとてもショックで言葉にならなかった。水は溢れるほどあると思っていたのに、同じ地球上に水がない地域があるのだ。この他にも、生活排水で汚れた川、汚水によって広がる伝染病。地球は、様々な問題を抱えているという厳しい現状にとっても驚いた。そして、蛇口をひねると飲み水が川てくるといのは、当たり前のことではなく、とても恵まれたことだという事を知り、水について更に深く考えた。

あれから三年が過ぎた。僕は今、水についてまた深く考えている。どうすれば、水を大切に使い続けるのだろうか。それには一人一人が、今の厳しい現状を知り、まずは、使用する水を限りなく節水し、環境に優しいせっけんを使う。心なく破棄されたゴミが水源を汚染しないように、しっかりと持ち帰り処分する。ゴミを見つけたら、拾ってゴミ箱に捨てる。きれいな水があることが当たりの僕にとって、最初は意外と難しいことでもあった。しかし、僕たちにできる小さな心掛けが、水を大切にすることだと気づき、僕の歩が地球を守る一歩になると考え、生活を見直していきたいと思う。

さあ、皆で水について考えてみよう。今からでもこの地球は、変わることができる。自分の中の変わらないといけない部分を見つけて、僕たちの地球を守っていこう。水についての知識を高め、未来へと大切な水を守っていこう。水はなくてはならない生命の源。それを次の世代へ守り抜くことが、僕たちのミッションだ。水は大切な資源だから！

地球こどもクラブ賞

タイトル：【緑の資源に支えられる生きものと地球】

茨城県 小学校6年生 正山 晴夏

ハトがいました！

私がモッコウバラの花びらをつんで遊んでいたら、ベランダまで伸びたモッコウバラの上の方の枝に、小枝をくわえたハトがとまっていました。

しばらく見ていたら、ハトは二羽いて、かわりばんこに小枝を持ってきて、巣を作っていたのです。二羽はつがい、これから卵を産むのでしょうか。家の庭では、たくさんの命が生まれているんだなあ、と思いました。

七年前に引っ越ししてきた時、庭はコンクリートとアスファルトで全部囲められていて、草は生えていないし、花も咲かないし、虫も鳥もやっこないような所でした。お化け屋敷みたい…と思って、古くてこわい庭でした。家族でアスファルトをはがして、植物や花や木を植えていきました。

今、春になるとうちの庭では、チューリップやバラが咲きほこり、木はきれいな緑の葉っぱをしげらせています。

なんてきれいなんだろう！

私が小さかった時、お兄ちゃんが、木の出す酸素を調べる実験をした事があります。私も研究所について行きました。小学生が生きていくのに、直径10センチで10メートルの木が7本必要という結果が出ました。私が思っていたよりも、生きるには、たくさんの酸素（木）が必要なのだと思いました。家の庭には、何本も木を植えたけれども、家族四人の酸素の分には、まだまだ足りないことが分かりました。

森や外国のジャングルでつくられた酸素が、地球を回って、私の所まで来ているのです。

私たちは、木や植物のつくってくれた酸素で息をして、木でつくった家に住み、木材を燃料にもしています。緑は、生きものたちの住処にもなります。住処があれば、新しい命が生まれます。緑は水を蓄えて、洪水を防ぎます。そして、きれいな花が咲き、おいしい実をつけてくれます。

バラの季節になると、私は庭のバラの花びらで砂糖漬けをつくっています。たくさんつくって、人にプレゼントしたら、みんなすごく喜んでくれました。花が咲くと、花見にお客さんもたくさん家に来てくれます。チョウチョも、虫も小鳥もハトもやってきます。家に来ると、みんな笑顔になります。

緑は、私たちに、生命と幸せを与えてくれます。緑は、生きものたちに、生きる力と喜びを与えてくれます。こんな素晴らしい地球の緑の資源を、私はこれからも大切にしていこうと思います。